

ドイツ現代文学における「空間論的転回」

副島 美由紀

1. ドイツ統一後の文学的傾向

小説のようにその形式が頗る自由で、しかも極めて個人的な作業による芸術作品においても、やはり流行というものが存在する。例えば1990年の東西ドイツ統一以降のドイツ現代文学においては、所謂“オスタルギー文学”、戦後世代の家族史物語、そしてポップ文学等を、流行したジャンルとして挙げる事が出来る。消滅した東ドイツ社会を記憶に留めることへの願望から生まれたオスタルギー文学の作品群には、T・ブルスイヒの『太陽通り』¹に代表されるように1990年代に生まれた作品も多いが、2008年に「ある沈没した国で起きた物語」という副題を持つU・テルカンプの『塔』²がドイツ書籍賞を受賞して注目を浴び、上記の願望の根強さを世に知らしめることとなった。また世紀転換期と前後して戦争を体験した世代が徐々に鬼籍に入る時代になると、それまで家庭内で抑圧されてきた過去の負の記憶を沈黙の束縛から解放しようとする欲求が起こる。そして従来あまり関心が払われなかった、戦争による個々の家庭内の悲劇に関する自伝的小説が生まれ、H-U・トライヒェルの『失われた者』³やU・ティムの『兄の選択』⁴またドイツ書籍賞受賞作で日本語にも翻訳されたユリア・フランクの『真昼の女』⁵などが、戦争によって引き起こされた家族内の克服し難い喪失感を開示して見せた。そしてこのように伝統的に政治的・内面的なドイツ文学に対する対抗文化として生まれたのがポップ文学である。資本主義社会における消費文化を肯定的に享受する世代を意味する「ジェネレーション・ゴルフ」⁶という新語も生まれ、C・クラハトの『ファーザーラント』⁷やB・v・シュトゥックラート-バレの『ソロアルバム』⁸等が物質的及び文化的消費を肯定して見せた。

以上のように流行現象の説明が比較的容易な文学ジャンルと比べると、「ポストモダン探検文学」、つまり実際に行われた歴史上の探検記をヒストリオグラフィック・メタフィクションとして再生した小説の流行は、その現象の理解が困難である。日本語にも翻訳されたD・ケールマンの『世界の測量』⁹やI・トロヤーノフの『世界収集家』¹⁰のように、「地図上の空白地帯」を求めて極地方やアフリカの奥地を目指す探検物語のポストモダンの再生により、ドイツ文学には「空間論的転回」がもたらされたと言われているが、¹¹なぜ過去の地理的な探検旅行に関心が集まるのかについては研究者の間には様々な見解があり、一義的な説明は困難である。例えば仮に日本において大黒屋光太夫の『北槎聞略』のパロディや河口慧海の『チベット旅行記』のメタフィクション的再話が出版され、それが次々とベストセラーになるとしたら、その理由について一度で腑に落ちる説明を行うことはやはり困難だろう。1990年代以降のドイツにおけるポストモダン探検文学の流行は、「説明が困難」¹²な「驚くべき現象である」¹³と言われているのであるが、だとすれば、現象を概観し、まずその多面性を把握することも理解へ至る方法の一つであろう。従って本論は、理論化の試みや具体的作品等、様々な局面に触れながらポストモダン探検文学の流行現象を紹介するものである。そしてそのことによって現代ドイツ文学における動向を理解する一助となることを目的としている。

2. 「崇高」のルネサンス¹⁴

ポストモダン探検文学がジャンルとして認識されるようになったのは、北極を通過する北西航路と北東航路の開拓を巡る探検を主題とした小説が好評を博して以降である。S・ナドルニーの『緩慢の発見』¹⁵(1983)はイギリス軍大佐で探検家のジョン・フランクリンの生涯を描いているが、彼が1845年に率いたカナダ北部の北極圏探検においては、隊員全員が死亡する結果となった。またC・ランスマイアーの『氷と闇の恐怖』¹⁶(1984)は、オーストリア・ハンガリー探検隊が1873年から2年間氷海に閉じ込められた際の艱難を題材にしている。このような艱苦に満ちた人間の体験を語る小説の成功という現象を理解するにあたり、まず援用された概念は「崇高」であった。この「時代遅れのカテゴリーの復活」¹⁷は、F・リオタールが1983年に行った講演「崇高と前衛」において、「前衛」という現代芸術の批判能力を擁護するために「崇高」という用語を解釈し直したことに端を発している。リオタールはその際カントやエドモンド・バークに遡り、「理解不能で説明不可能なもの」¹⁸と、「苦」や「恐怖」を根拠とする崇高の感覚とを結びつけた。以降美学に関する考察において、20世紀の日常会話においては忘却され、殆ど意味不明となっていたこの「崇高」という言葉が頻繁に登場するようになる。¹⁹ドイツでは哲学者のマルティン・ゼールが、統一や融和に抗うヘテロ的なものの擁護という意味をリオタールの現代崇高論に加味し、²⁰大掛りなものを志向したファシズムの影からこの概念を解放しようとする。²¹さらにゼールはカントの『判断力批判』とアドルノの非同一性としての自然という議論を継承しながら、人間にとっての自然経験を異質性として捉える自然美学を提唱した。²²

このような現代の崇高論の発展を意識しつつ、北極圏をテーマにした小説の成功の原因を崇高感覚の復活に求める解釈が誕生する。²³特に『氷と闇の恐怖』においては、北極探検の際に描かれた風景スケッチが多数挿入されていることもあり、氷海を突破した人々の艱難の物語を受容する際の感覚に「苦」や「恐怖」、またその緩和が引き起こす「快」²⁴といったバークやリオタールの崇高論の要素を見ることは説得力があるだろう。またゼールの自然美学が人間にとって異質性の体験を前提にしていることを考えれば、これらの小説において峻厳な自然の情景よりむしろ苦難に遭う人間の葛藤の方に重点が置かれていることにも納得がいくかもしれない。しかし以下に紹介するようにポストモダン探検文学の諸作品は様々な舞台や筋書きを持っており、「現代崇高ブーム」²⁵という現象のみによってこのジャンルの流行を説明付けることは出来ない。現代の探検記と現代の「崇高論」との関連付けは、あくまでも理論化の契機という役割を果たしたと言うべきであろう。

3. 空間と国境の可変性

60年代以降から、ポストモダン精神の拡大及び“グランレシ”の失墜と共に歴史物語の相対化という知的作業が進行した訳であるが、ヒストリオグラフィック・メタフィクションというジャンルの誕生は、それまで文学の亜流のように扱われてきた「歴史小説」というジャンルの、言わばリハビリテーションのようなものでもあった。²⁶そしてポストモダン探検文学がヒストリオグラフィック・メタフィクションのサブジャンルであることを考えれば、その流行はある程度は納得のいく事である。しかも探検という行為が生存圏の拡大に関わる物語であれば、その再読は二

重の検証的意味を持つはずである。ポストモダン探検文学の殆どが植民地時代の物語であり、植民地主義の空間に関する認識は、地理学における空間論的転回の際に主張されたように、帝国主義と近代資本主義の生産様式によって生産されていたはずであった。従ってポストモダン文学における探検記の再話には、帝国主義と近代資本主義による空間意識の相対化という意義がある。

「崇高論」にあまり関心の持てなかった研究者たちは、このようにしてポストモダン地理学の中にポストモダン探検文学を理解するための理論的支柱を見出し、「ドイツ文学における空間論的転回」論が誕生する。

そして近代資本主義とその影響力も当然変容を起こしている。1990年前後に起こったヨーロッパにおける政治的変動によって冷戦構造が融解し、ベルリンの壁が消滅して国境線が移動すると、例えば「東」はもはや従来と同じ「東」ではない。このように空間意識の政治的な偶然性が意識されたことを、ドイツ文学における空間論的転回の契機として挙げる説もある。²⁷また東西ドイツの統一によってドイツが従来の地方性からの脱却を目指したことも、ポストモダン探検文学の流行の一因であると言われている。²⁸さらに現代ではメディア技術の革新やグローバリゼーションによっても空間意識が変容している。そしてドイツ文学はこのようにして起きた文学における空間論的転回により、「世界含有性(Welthaltigkeit)」を獲得したと言われるようになり²⁹、さらにはドイツ現代文学の世界文学としての資質といったことも論じられるようになっていく。³⁰しかし、実はこれらの文学において舞台となる地域自体についての関心は低いと指摘されていることを考えると、³¹現代ドイツ文学における「世界含有性」や世界文学性については即座には肯定できない側面もあり、やはりこの空間論的転回現象には「説明困難」な部分が残ったままと言わざるを得ない。従って以下ではポストモダン探検文学の作品自体に視点を移し、代表的な作品について概説的な紹介を行う。しかしまずは文学の空間論的転回に付随して起きている現象について言及する。

4. 「測量」の再評価

文学における空間論的転回に付随して現代ドイツの人文科学の分野で起きている現象として、「測量」の再評価がある。測量学及び地図学に対する最近の関心の高まりは、ポストモダン文学の旗頭であるピンチョンが『メイスン&ディクスン』³²(1997)において、アメリカ建国に関わる測量作業を描き出したことに端緒があると推測される。この小説は、二人のイギリス人測量士がアメリカの北部と南部、つまり自由州と奴隷州の境界線(メイスン・ディクスン線)を画定した作業を物語るものだが、ドイツではF・キッターが「測量士の世紀」³³という書評を書き、この作業が如何に大英帝国の覇権と関わっていたか、従来ヨーロッパ諸国の領土支配が測量士の算出する数字と地図に如何に依存してきたかに言及した。2004年にはA・フォン・フンボルトの『コスモス』が復刻されて話題となり、その翌年ケールマンの小説『世界の測量』が大きな注目を浴びる。主人公であるフンボルトとガウスは19世紀の測量学の発展にも貢献した存在であり、小説でもその測量技術が描写される。トロヤーノフの『世界収集家』においても東インド会社の土地開拓に貢献したウォルター・スコット大尉が登場し、「君に必要なのは測量士としての性質だけだ」³⁴と言って部下である主人公のリチャード・パートンに測量技術を教えている。また、A・カピュの『時間の問題』³⁵では、主人公たちの敵対者となるイギリス軍のシムソン大尉が、元々イギリス海

軍に任じられてガンビア川の測量と地図作製のためにアフリカに派遣された人物であった。このように、ポストモダン探検文学において潜在的に不可欠な存在である測量士あるいは地図製作者とその役割に、徐々に注目が集まるようになる。当然現代文学における虚構の作品においても、ドイツ領南西アフリカを舞台にしたG・ザイフリートの『ヘレロ』³⁶のようにドイツ人測量士を主人公とする小説や、その作業が植民地において有する意味について考察する論考なども誕生している。³⁷また、従来の文学作品に登場した測量士という存在—作品の舞台となる時代においては既に存在感を失った存在となっている—にも回顧的な眼差しが向けられるようになった。例えばカフカの『城』の主人公やシュティフターの『石さまさま』における「私」という語り手、またカール・マイにおける中心的登場人物のヴィネトウ等である。³⁸

この測量の再評価という現象は、多くの関連書籍の出版や、³⁹ベルリン国立図書館で2016年に行われた「世界の測量士：地上、海上及び宇宙空間」⁴⁰という展覧会の開催等にも表れており、これは現在でも進行中の動向である。『地球の地図化』⁴¹という著書があるR・シュトックハマーによると、空間論的転回によってもたらされ、空間が人為的に構築されるという意識を先鋭化させるこの「測量の好景気」には、GPSや衛星写真の登場によって消滅しつつある紙媒体の地図に対するノスタルジーもその一端を担ってはいるが、⁴²それは過去においても現在においても自己の位置を同定することに対する人間の関心の強さを物語るものでもある。⁴³

5. 南北両極地方

以下からはポストモダン探検文学において人気のあるトポスを紹介するが、ナドルニーとランスマイヤーによる成功例が示すように、このジャンルにおいて最も人気のある物語の舞台は、南北の両極地方である。ナドルニーもランスマイヤーも、実は最初から北極自体に対する関心があった訳ではなかったらしいが、⁴⁴実際には両極地方における探検はポストモダン以前にも人気のある歴史物語の題材であった。⁴⁵南極で遭難したR・S・スコットの日記は既に1951年にドイツで出版されているし、⁴⁶1965年にはK・バイヤーが、V・ベーリングのカムチャッカ探検を題材にした『ヴィトウス・ベーリングの頭』⁴⁷という作品を残している。しかしポストモダン文学としてこのような題材を再生させたのはやはりナドルニーが最初であった。以降、紀元前4世紀のギリシャの歴史家ピュテアスが行った北極圏航海を再現したラウル・シロットの『フィニス・テラエ』⁴⁸を始め、グリーンランド探検における隊員の人間模様を描いたM・ケールマイヤーの『英雄たちの遊技場』⁴⁹、スバルバル諸島の一部をドイツ帝国領土として獲得する試みを戯画化したM・モーゼバッハの『霧の領主』⁵⁰、南極大陸横断に挑んだアーネスト・シャクルトンを主人公としたM・ボネの『氷のように冷たい空』⁵¹、ドイツ人の極地探検家であるA・ヴェーゲナーのグリーンランド探検を題材としたJ・レンドレの『すべて陸地』⁵²、自らが過去に行った南極旅行を綴ったH・C・ブーフの『氷を割る11の方法』⁵³等、多くのポストモダン探検文学が誕生している。

興味深いのは、ポストモダン探検文学の成功によって探検という行為に関心が払われたことにより、両極地方その他の探検地のトポスを巡ってポストモダン小説、ノンフィクション作品、⁵⁴フィクションの小説、探検家自身の探検記の再版⁵⁵といった様々な出版活動が行われていることである。それはちょうどJ・クリフォードが『文化を書く』及び『文化の窮状』⁵⁶によって“文化”という概念の人為性を指摘し、人類学者によるフィールドワーク記録の“文学化”に注意を喚起

したように、空間に関わる記録の“文学化”を意識させる動きである。またI・トロヤーノフの虚構作品『氷霧』⁵⁷のように、その動きを利用して南極大陸の窮状と地球の温暖化を訴える作品も誕生しており、両極地方は今後も読者や研究者の反応も含めて注視していくべきトポスであると言えよう。

6. 砂漠地帯

極地探検と並んで探検家たちを引きつける「地図上の空白地帯」は、やはり砂漠である。極地同様に厳しい自然が人間の探求心を刺激するのではあろうが、砂漠地域の異文化との遭遇もこの地域を舞台とするポストモダン探検文学の隠れたテーマとなっている。ポストモダン文学として最初に砂漠地方を扱ったのはM・レースの『ルプアルハリ：空白の土地』⁵⁸で、この作品はドイツ人の測量士で18世紀にアラビア地域を探検したカールステン・ニープールの記録に基づきつつイエメンの遊技文化を主題とし、過去と現在の語り手が同時に登場する複雑な構成の小説である。スイス人のA・カピュは同国人のヴェルナー・ムンツィンガーを主人公に『ムンツィンガー・パシャ』⁵⁹を書いている。彼は紅海地方のパシャ（総督）としてエジプト政府に仕えながらアビシニアやスーダン地方の探検を行った人物である。またオーストリアのW・グロントは、ハンガリー生まれでオーストリア空軍のパイロットであったラーディスラウス（ラースロー）・アールマースィーを扱った『アールマースィー』⁶⁰を発表している。アールマースィーは「泳ぐ人の洞窟」として知られるリビア砂漠の岩絵を発見した探検家で、M・オンダーチェの小説『イギリス人の患者』及び映画「イングリッシュ・ペイシエント」の主人公のモデルでもあり、映画化の翌年にアールマースィー自身の探検記『砂漠の泳人』⁶¹が再版されている。グロントの小説では、オンダーチェの虚構の筋書きも利用しながらアールマースィーの砂漠探検家としての側面が強調されている。やはりオーストリアのT・シュタングルには19世紀前半のトンブクトゥ探訪を主題とした『唯一の場所』⁶²という作品がある。イギリス人のアレクサンダー・ゴードン・レインとフランス人のルネ・カイエによる二種類の探検を並列的に再現しながらアフリカの歴史を記述したもので、植民地主義や人種主義に関する省察を行うと同時にサハラ地方に関する西洋的想像力を相対化する哲学的なポストコロニアル文学となっている。極地探検の場合と同様、ニープールの、ムンツィンガー、カイエ等の旅行記も近年相次いで復刻・再版されているが、⁶³砂漠を舞台としたポストモダン文学の場合、自然が持つ崇高美よりもサハラ地域の異文化が持つ魅力を伝達することへの関心が文学的想像の背景にあるように思われる。しかしやはり砂漠を舞台としたノンフィクション作品⁶⁴や虚構作品⁶⁵も生まれており、砂漠自体が文学にとって魅力のあるトポスだということも確かだと言えよう。

7. 旧ドイツ領の再発見

ドイツ統一による状況の変化と共にドイツの植民地時代の歴史に関する回顧が始まったことは、ドイツ文学の全体にとっても大きな意味を持っていた。それまで忘却されていたドイツの植民地、つまりタンザニアやルワンダ、ナミビア等の旧ドイツ領アフリカや、サモアやニューギニア等の

旧ドイツ領南洋などが、植民地主義的文学であれ、ポストコロニアル文学であれ、純文学であれ大衆文学であれ、創作の分野においても研究の分野においても、文学の分野における新たな地平として展望されるようになったからである。しかし植民地支配の時代は批判的検証の対象であるばかりでなく懐古の対象でもあり、この記憶の領域には、ネオコロニアル、コロニアル以降、疑似コロニアル(neo-, nach-, quasi-kolonial)という様々な名称で呼び得る願望の様相が混在していると言われている。⁶⁶文学の領域でも、U・ティムの『モレンガ』⁶⁷のようなポストコロニアル文学ばかりではなく、特に大衆文学の分野で「アフリカ小説」「南洋小説」と呼ばれる疑似コロニアル的な娯楽文学が誕生しており、この新たな記憶領域は一種の「緊張領域」ともなっている。なぜ一見時代遅れとも思われるコロニアル的な文学作品が生まれるのかという問いに対しては、トロヤーノフの『世界収集家』における台詞が答えの代わりとなるであろう。そこではリチャード・バートの旅行記がなぜイギリスでよく売れるのかについて、オスマン帝国駐ロンドン大使が本国への報告書の中で次のように述べている。「大英帝国の臣民たちは世界征服という冒険に参加しようと望んでおり、自分たちの存在証明となり得る同時代の伝説を求めています。」⁶⁸これまで自分の国には大英帝国やフランスのような植民地支配の歴史がないものと考えていたドイツ人たちは、今世紀になって自分たちの旧植民地を再発見し、かつて自分たちに拒まれていた世界征服に関わる冒険を、バートの時代のイギリス人たちのように想像の中で追体験しようとしているのではないだろうか。植民地における実在の探検談の再話とその受容には、同時代ではないが同国人の伝説を求める心情が或る程度働いているように推測される。例えばH・C・ブーフの『アフリカのカインとアベル』⁶⁹は、後にルワンダとなるドイツ領東アフリカにおいてナイル川の源流の一つを発見したりヒャルト・カントの物語であるし、C・ハーマンの『ウサンバラ』⁷⁰はドイツ領東アフリカのキリマンジャロ山に初登頂したハンス・マイアーに関する物語である。A・カピュの『時間の問題』はタンガニーカ湖に汽船を運んだパーペブルク造船所の技師の冒険を伝えており、H・C・ブーフの『ザンジバル・ブルース』⁷¹はドイツ帝国とイギリスに分割統治されていた時代のザンジバルの物語である。同様に旧ドイツ領南洋に関しても、M・ブールの『アウグスト・エンゲルハルトの楽園』、⁷² C・クラハトの『帝国』、⁷³ 及びH・C・ブーフの『ノルデと私』⁷⁴などのポストモダン探検小説が誕生している。特に題材の多い旧アフリカ領については、恐らく今後もノンフィクションやポストモダン文学が誕生する可能性があり、アフリカの“緊張領域状態”は今暫く続いていくのかもしれない。

8. 旅する女性の再評価

旅行文学というジャンルにおいては当然旅する女性が存在するわけだが、ポストモダン探検記においても女性を主人公にした作品が存在する。例えばU・ナウマンの『ユーフラテスの女王』⁷⁵とウーヴェ・ティムの『半影』⁷⁶である。ナウマンの小説の背景には、大英帝国とロシア帝国が中央アジアの覇権を争っていた「グレート・ゲーム」がある。スエズ運河が開通する33年前、イギリスはトルコからユーフラテス川を航行してペルシャ湾へ至る経路を開拓するため、探検家のフランシス・チェスニー中佐を派遣する。その時に使われた外輪船ユーフラテス号に、ドイツ人女性のパウリーネ・ヘルファーが乗船していた。冒険心のあるパウリーネは、様々な民族が住むユーフラテス川流域の探検に男装して同行する。『ユーフラテスの女王』はチェスニーと並んでパ

ウリーネを副主人公として扱い、複雑な政治事情の中で暮らすメソポタミア地域の諸民族の様子を興味深く描いている。⁷⁷ またティムの『半影』の主人公は、ドイツにおける女性パイロットの草分けの一人、マルガ・フォン・エツドルフである。彼女は女性で初めてルフトハンザの副操縦士となった人物で、1931年には世界で初めてベルリン-東京間の単独飛行を果たし、当時開場間もない羽田空港に着陸している。しかしやはり単独で南アフリカを目指した際、シリアのアレッポ郊外の飛行場で着陸に失敗した後に拳銃自殺してしまう。作品はこれらの飛行体験を描くと同時に先入観を排して彼女の自殺の理由を推測する内容となっており、同時に彼女と緩やかな連関を持つ多くの人々の声を登場させる典型的なポストモダン小説となっている。

やはり男装してマグレブ世界に生きたスイス人のイザベル・エーバーハルト（エベラール）は本来フランス語圏の作家であるが、特にドイツにおいて再評価の動きがある。ヨーロッパの慣習とは無縁のノマド的人生を送った彼女は、まず女性解放運動の文脈において賞賛され、その短い生涯は映画にもなった。⁷⁸ 最近の再評価の流れにおいては彼女の旅行記や伝記小説が出版され、⁷⁹ 彼女を主人公としたオペラ作品も制作されている。⁸⁰ やはり近年研究が行われている旅行作家として、クラウス・マンとも旅をし、アフガニスタンやアフリカに旅行したアンネマリー・シュヴァルツェンバッハを挙げるべきであろう。⁸¹ 女性の旅行作家の場合一般に言えることではあるが、その回顧⁸²において作品自体よりもむしろ彼女たちの個人生活に関心が向けられる傾向がある。それはシュヴァルツェンバッハの場合、裕福で世界市民的な生活、ナチス信奉者の家族との確執、同性愛と鬱病、エーリカ・マンとの関係、孤独と悲劇的な死といった事実であるが、⁸³ そもそも女性探検家の場合、存在が市民的社会規範から逸脱しているという点において境界の侵犯と空間の流動化が既に起きているのであり、実はこのような女性探検家の業績の回顧こそ文学における空間的転回を最も強力に推し進める推進力となるのかもしれない。日本でもイザベラ・バードが再評価され、彼女を題材としたポストモダン探検文学⁸⁴やコミック作品⁸⁵まで誕生しているのも、このような題材自体の力が発揮されている証拠かもしれない。

9. 結 語

世界がまだ広がった時代の記憶を辿り、探検を体験し、空間意識を相対化する行為は、リオタールの言う一種の「快」を伴うものではあるだろう。しかしそれだけで「世界含有性」や世界文学性を獲得できる訳ではない。「帝国の視点」に拠る物語であればそれは西洋中心主義の反復であり、そのような作品に対する批判は「彼らの魂はルフトハンザ航空のメンバーカードのように小さい」⁸⁶といった、旅する作家たちについての辛口の文芸批評にも表れている。個々の作品にはシュタングルの『唯一の土地』のように西洋的意識の相対化に成功している場合や、クラハットの『帝国』のように植民地主義文学のパロディとも言えるものまで様々な特質があり、やはりそれぞれの作品の資質を検討しなければならない。そのような意味において、如何に空間意識を相対化し、如何にポストモダンであるとは言え、境界を越えて異境へ達するからには常に異文化との緊張関係が存在する。しかしその緊張関係の流動こそ空間論的転回を伴う文学が暗示的に予告しているものだとも言えよう。

【本稿はJSPS科研費 15K02400 の助成を受けたものである。】

註

- 1 Thomas Brussig: Am kürzeren Ende der Sonnenallee. Berlin 1999.
- 2 Uwe Tellkamp: Geschichte aus einem versunkenen Land. Frankfurt a. M. 2008.
- 3 Hans-Ulrich Treichel: Der Verlorene. Frankfurt a. M. 1998.
- 4 Uwe Timm: Am Beispiel meines Bruders. Köln 2003.
- 5 Julia Franck: Die Mittagsfrau. Frankfurt a. M. 2007.
- 6 Florian Illies: Generation Golf. Eine Inspektion. München 2000.
- 7 Christian Kracht: Faserland. Köln 1995.
- 8 Benjamin v. Stuckrad-Barre: Soloalbum. Köln 1998.
- 9 Daniel Kehlmann: Die Vermessung der Welt. Hamburg 2005.
- 10 Ilija Trojanow: Der Weltensammler. München 2006.
- 11 Edgar Platen : Norden. Zu seinen Darstellungen in der Nachkriegs- und Gegenwartsliteratur. 2012, S.10; Leonhard Herrmann: The North Faith. In: Zeitschrift für Deutsche Philologie. Sonderheft. 131. 2012, S.252.
- 12 Hansjörg Bay/Wolfgang Struck: POSTKOLONIALES BEGEHREN. In: Gabriele Dürbeck/Axel Dunker(Hg.): Postkoloniale Germanistik. Bielefeld 2014, S.463.
- 13 Alexander Honold: Literatur in der Globalisierung – Globalisierung in der Literatur. 2010,S.9.<http://www.germanistik.ch/publikation.php?id=Literatur_in_der_Globalisierung> [Abruf:05.10.2016]
- 14 Christine Pries: Einleitung. In: Dies.(Hg.): Das Erhabene: zwischen Grenzerfahrung und Größenwahn. Weinheim 1989, S.1.
- 15 Sten Nadolny: Die Entdeckung der Langsamkeit. München 1983.
- 16 Christoph Ransmayr: Die Schrecken des Eises und der Finsternis. Wien 1984.
- 17 Michaela Kopp-Marx: Zwischen Petrarca und Madonna: der Roman der Postmoderne. München 2005, S.197.
- 18 ジャン・フランソワ・リオータル(篠原資明他訳)「崇高と前衛」In:リオータル『非人間的なもの』(法政大学出版局 2002), 130頁。
- 19 Pries: Einleitung, S.1.
- 20 Martin Seel: Gerechtigkeit gegenüber dem Heterogenen? Ein neuer Sammelband über das Erhabene. In: Merkur. 9-10.1989, S.916-922.
- 21 Kopp-Marx: Zwischen Petrarca und Madonna, S.199f.
- 22 マルティン・ゼール(加藤泰史・平山敬二訳)『自然美学』(法政大学出版局 2013)
- 23 Torsten Hoffmann: Konfigurationen des Erhabenen. Zur Produktivität einer ästhetischen Kategorie in der Literatur des ausgehenden 20. Jahrhunderts. Berlin 2006, S.125ff.
- 24 リオータル「崇高と前衛」,134 頁。
- 25 桑島秀樹『崇高の美学』(講談社 2008), 87頁。
- 26 Platen: Norden, S.110.
- 27 Ebd., S.9f.
- 28 Bay/Struck: POSTKOLONIALES BEGEHREN, S.459.
- 29 Christof Hamann/Alexander Honold: Ins Fremde schreiben. Zur Literarisierung von Entdeckungsreisen in deutschsprachigen Erzähltexten der Gegenwart. In: dies.(Hg.): Ins Fremde schreiben. S.9.
- 30 Alexander Honold: Ankunft in der Weltliteratur : abenteuerliche Geschichtsreisen mit Ilija Trojanow und Daniel Kehlmann. In: Neue Rundschau, Jg. 118, H. 1. 2007, S. 82-104; Thomas Oliver Beebee (Hg.): German Literature as World Literature. Bloomsbury Publishing 2014.
- 31 Bay/Struck: POSTKOLONIALES BEGEHREN, S.457ff.
- 32 トマス・ピンチョン(柴田元幸訳)『メイスン&ディクスン 上・下』(新潮社 2010)
- 33 Friedrich Kittler: Das Jahrhundert der Landmesser. In: Die Zeit,27.06.1997, S.46.
- 34 Trojanow: Der Weltensammler. DTV, München 2007, S.121.
- 35 Alex Capus: Eine Frage der Zeit. München 2007. (邦題『アフリカで一番美しい船』)

- 36 Gerhard Seyfried: Herero. Berlin 2004.
- 37 Bay/Struck: POSTKOLONIALES BEGEHREN. hier S.473-481.
- 38 Robert Stockhammer: Zur Konjunktur der Landvermesser. In: Christof Hamann/Alexander Honold (Hg.): Ins Fremde schreiben: Gegenwartsliteratur auf den Spuren historischer und fantastischer Entdeckungsreisen. Göttingen 2009, S.87ff.
- 39 Paul Murdin: Die Kartenmacher: Der Wettstreit um die Vermessung der Welt. Mannheim 2010; Aeka Ishihara: Die Vermessbarkeit der Erde : die Wissenschaftsgeschichte der Triangulation. Würzburg 2011; Wolfgang Seidel: Sternstunden: die abenteuerliche Geschichte der Entdeckung und Vermessung der Welt. Köln 2014; Reinhard Barth: Die Vermessung der Erde - Die Geschichte der Kartografie von der Papyrusrolle bis zum GPS. Köln 2015, usw.
- 40 Ausstellung "Weltvermesser - von Erde, Meer und Himmel" vom 14.6.-2.7.2016. Staatsbibliothek zu Berlin.カタログは以下の版: Michael Bischoff(Hg.): Weltvermesser: Das goldene Zeitalter der Kartographie. Dresden 2015.
- 41 Robert Stockhammer: Kartierung der Erde: Macht und Lust in Karten und Literatur. München 2007.
- 42 Stockhammer: Zur Konjunktur der Landvermesser. S.100.
- 43 Ebd., S.101.
- 44 日本語版『緩慢の発見』の「訳者あと書き」によると、ナドルニーにとって友人のカナダ移住が北極圏への関心の始まりであり、また2015年オーストリア現代文学ゼミナールにおけるランスマイアーの談話によると、パイアーの風景スケッチにキャプションを書く仕事を依頼されたことが小説執筆に至るきっかけであったらしい。
- 45 Kopp-Marx: Zwischen Petrarca und Madonna. S.226ff.
- 46 Robert Falcon Scott: Letzte Fahrt : Scotts Tagebuch. Leipzig 1951.
- 47 Konrad Bayer: der kopf des vitus bering. Freiburg 1965.
- 48 Raoul Schrott: Finis Terrae. Innsbruck 1995.
- 49 Michael Köhlmeier: Spielplatz der Helden. München 1988.
- 50 Martin Mosebach: Der Nebelfürst. Frankfurt a.M. 2001.
- 51 Mirko Bonné: Der eiskalte Himmel. Frankfurt a.M. 2006.
- 52 Jo Lendle: Alles Land. München 2011.
- 53 Hans Christoph Buch: Elf Arten, das Eis zu brechen. Frankfurt a.M. 2016.
- 54 Alfred Lansing: 635 Tage im Eis: die Shackleton-Expedition. München 1999; Ernest Shackleton: Mit der Endurance ins ewige Eis. München 2000; Klaus Rohrbach: Abenteuer in Schnee und Eis - Alfred Wegener. Stuttgart 2008.
- 55 Alfred Lothar Wegener: Mit Motorboot und Schlitten in Grönland. Wiesbaden 2013, usw.
- 56 ジェイムズ・クリフォード/ジョージ・マーカス編(春日直樹他訳)『文化を書く』(紀伊國屋書店1996); ジェイムズ・クリフォード(太田好信他訳)『文化の窮状: 二十世紀の民族誌、文学、芸術』(人文書院 2003)
- 57 Ilija Trojanow: Eis Tau. München 2011.
- 58 Michael Roes: Rub al-Khali - leeres Viertel. Frankfurt.a.M. 1996.
- 59 Alex Capus: Munzinger Pascha. Zürich 1997.
- 60 Walter Grond: Almásy. Innsbruck 2002.
- 61 Ladislaus E. Almásy: Schwimmer in der Wüste. Auf der Suche nach der Oase Zarzura. Innsbruck 1997.
- 62 Thomas Stangl: Der einzige Ort. Graz-Wien 2004.
- 63 Werner Munzinger: Ostafrikanische Studien. Saarbrücken 2007; Carsten Niebuhr(Hg.): Entdeckungen im Orient: Reise durch Arabien im Auftrag des dänischen Königs. Wiesbaden 2012; René Caillié /Heinrich Pleticha (Hg.): Reise nach Timbuktu: Der erste Bericht über die sagenumwobene Stadt. Wiesbaden 2013.
- 64 Hanno Martin: Wenn es Krieg gibt, gehen wir in die Wüste. Hamburg 2002.
- 65 Raoul Schrott: Die Wüste Lop Nor. Frankfurt a.M. 2003; Wolfgang Herrndorf: Sand. Berlin 2011.
- 66 Hansjörg Bay/Wolfgang Struck: POSTKOLONIALES BEGEHREN. In: Gabriele Dürbeck/Axel Dunker(Hg.): Postkoloniale Germanistik. Bielefeld 2014, S.457ff.
- 67 Uwe Timm: Morenga. München 1978.
- 68 Trojanow: Der Weltensammler. S.234.
- 69 Hans Christoph Buch: Kain und Abel in Afrika. Berlin 2001.
- 70 Christof Hamann: Usambara. Göttingen 2007.

- 71 Hans Christoph Buch: Sansibar Blues. Frankfurt a.M. 2008.
- 72 Marc Buhl: Das Paradies des August Engelhardt. Frankfurt a.M. 2011.
- 73 Christian Kracht: Imperium. Köln 2012.
- 74 Hans Christoph Buch: Nolde und ich. Ein Süsdeetraum. Berlin 2013.
- 75 Ursula Naumann: Euphrat Queen: Eine Expedition ins Paradies. München 2006.
- 76 Uwe Timm: Halbschatten. Köln 2008.
- 77 Robert Schopflocher: Schwimmendes Eisen auf dem Euphrat. 26.09.2006.
<<http://www.spiegel.de/spiegel/spiegelspecial/d-48991782.html>> [Abruf:05.10.2016]
- 78 Isabelle Eberhardt: 監督: Ian Pringle. 1991.
- 79 Isabelle Eberhardt/Christian Bouqueret(Hg.): Sandmeere 1. Tagwerke. Hamburg 2004; Dies./Dies.(Hg.): Sandmeere 2. Notizen von unterwegs. Hamburg 2005; Alexandra Lavizzari: Nach Kenadsa. München 2005; Magdalena Tzaneva (Hg.): Männerherz bewahren – 130 Stimmen zum Werk von Isabelle Eberhardt. Berlin 2007; Alex Capus: Isabelle Eberhardt. In: Ders.: Himmelsstürmer. Zwölf Portraits. München 2008, S.155–169.
- 80 Missy Mazzoli: Song from the Uproar: The Lives and Deaths of Isabelle Eberhardt. 初演: New York 2012.
- 81 Annemarie Schwarzenbach: An den äussersten Flüssen des Paradieses. (Ausgewählte Werke 1) Basel 2016; Dies.: Das glückliche Tal. Basel 2010; Dies.: Afrikanische Schriften. Reportagen – Lyrik – Autobiographisches. Zürich 2012.
- 82 Charles Linsmayer: Annemarie Schwarzenbach: Ein Kapitel tragische Schweizer Literaturgeschichte. Stuttgart 2008; Alexandra Lavizzari: Fast eine Liebe: Annemarie Schwarzenbach und Carson McCullers. Berlin 2008.
- 83 武田良材 「アンネマリー・シュヴァルツェンバハにおける反ナチス:エーリカ、クラウス・マン、そして山との関係」 In: 「研究報告」(京都大学大学院独文研究室研究報告刊行会 2008), 22号, 91–111頁。
- 84 中島京子 『イトウの恋』(講談社 2005)
- 85 佐々大河 『ふしぎの国のバード I/II』(KADOKAWA 2015/16)
- 86 Iris Radisch: Vom Mi, Ort der Seele. Was der jungen deutschen Neckermannliteratur fehlt. In: DIE ZEIT 21.08.2003.